

## 『池の藻屑』と軍記物語

森 安 雅 子

荒木田麗女の『池の藻屑』十四卷（明和八年（一七七七）二月成立）は、元弘の乱で隠岐に配流された後醍醐天皇が京都に還幸した元弘三年（一二三三）より、徳川家康が征夷大將軍に就任して江戸に幕府を開いた後陽成天皇の慶長八年（一六〇三）までに至る約二七〇年間の出来事を、北朝方の事跡を中心に編年体で書き綴った歴史物語である。『池の藻屑』の出典に関しては、『太平記』、『吉野拾遺』、『新葉和歌集』、『太閤記』、『豊鑑』などいくつか断片的に明らかになっているもの<sup>(1)</sup>、南北朝時代から安土桃山時代にかけての広範な時代を対象とする本書には、これまでに指摘されている以外にもっと多くの資料が作品中に利用されているものと考えられる。

『池の藻屑』については、今後も検討していかなければならぬ問題点が数多く残されており、とりわけ基礎的な問題として、作品の出典等に関する考察は急務を要すると思われる。そこで本

稿では、『池の藻屑』の主要な典拠の一つである軍記物語を取り上げて、両者の影響関係を具体的に比較検討することとし、今回取り上げることができなかった資料については、後日稿を改めて報告したいと思う。尚、本稿において考察の対象とした軍記物語は、『太平記』、『後太平記』、『統太平記』の三作品である。

### 二

『池の藻屑』と『太平記』の影響関係については早くから指摘されてきたが、中でも麗女が『池の藻屑』を執筆する際に参照した『太平記』のテクストは、今井弘済と内藤貞頭が編纂した『考太平記』（元禄二年（一六八九）成立、同四年刊）であったと考えられる。本書の特色は、『太平記』の流布本を底本に用いて異本九部との主要な本文異同を明らかにした上で、更に一〇四部の文献資料（補任・系図の類、諸家の日記、願書・訴状の類、歴史・文学書の類など）を引用して、『太平記』の記述と史実との関係に厳密な校訂を施している点<sup>(2)</sup>にあり、麗女が数多い『太平記』

の諸本の中から、『参考太平記』を選択した背景には、以上のよう  
な本書の性格が大きく関与していたものと推測される。

『池の藻屑』は、巻一「後醍醐天皇」の元弘三年（一二三三）  
から巻五「後光厳院」の貞治六年（正平二十二年、一三六七）に  
かけての記事に、『参考太平記』巻十二―巻四十の記事を利用し  
ていると考えられるが、両者の関係で注目されるのは、その本文  
のみにとどまらず、『参考太平記』が収録する諸本の異同や文献  
資料も『池の藻屑』に取り入れている点である。

例えば、『池の藻屑』巻一「後醍醐天皇」の建武二年（一二三五）  
条、万里小踏藤房の突然の出家に驚いた後醍醐天皇が翻意させる  
べく父の宣房卿を岩倉へ派遣する場面では、『参考太平記』巻十  
三「岩清水行幸 藤房卿遁世事」を次のように利用している。

内にはかくと聞せ給ふにぞ、いみじう驚かせ給ひて、「立か  
へりふた、び世につかへ給ふべくいさめられよ」と、父の宣  
房をめして、仰下されしかば、急ぎ使をつかはして、「いと  
有まじき事なり」とて、せちにさまたげ聞え給ひつゝ、立か  
へり給ふべくいひ遣はし給へる返事なり。

何事のうら山しさに懼るべき世に有とてもそむきこそせ  
め

とのみ聞え給ひしかば、父君はなく、彼処に尋行き給ひけ  
るに、中納言はけさまで岩倉の坊におはしけるが、委も猶都  
近くて、悪かりなと思ひ給ひ、いつちともなく出給ふれば、

父君はいと本意なく悲しくて、涙もとゞめがたし。

（『池の藻屑』）

此事叙聞二達シケレバ、君限ナク驚キ思召テ、「其在所ヲ急  
ギ尋出シ、再政道輔佐ノ臣ト成ベシ」ト、父宣房卿ニ仰下サ  
レケレバ、

○天正本云、君モ大ニ驚キ思召テ、「其在所ヲ尋、急ギ再  
政道輔佐ノ臣ト成ベシ」ト、宣房卿ニ仰下サレシカバ、此  
由岩蔵ヘ申遣サレタリケル。其返事ニ、

何事ノ漢シサニ帰ベキ世ニ在トテモ厭コソセメ  
ト申サレケレバ、宣房岩蔵ヘ尋行給ヒケル、云々。

宣房卿泣々車ヲ飛シテ、岩蔵ヘ尋行給ヒケルニ、中納言入道  
ハ、其朝迄岩蔵ノ坊ニオハシケルガ、是モ尚都近キ傍リナレ  
バ、浮世ノ人事間カハス事モソアレト厭ハシクテ、何地ト  
云方モナク、足ニ信テ出給ヒケリ。（『参考太平記』）

ここで注意されるのは、流布本では帝の命を受けた宣房はすぐ  
さま岩倉へ直行しているのに対して、天正本では宣房は先ず藤房  
の許へ使者を遣わし、藤房の固い出家の決意に驚いて岩倉へと馳  
せ参じている点である。このストーリー展開は、他の諸本とは異  
なる天正本独自のものとして、『池の藻屑』が採用した箇所であっ  
たと考えられる。一方、藤房の拒絶にあつて宣房が「なく、」  
岩倉を尋ねて行つたという描写は、逆に天正本には該当箇所がな  
く、この部分は流布本の「宣房卿泣々車ヲ飛シテ、岩倉へ尋行給

ヒケル」という一節を踏まえたものと考えられる。つまり、『池の藻屑』はこの場面の構成に際して、『参考太平記』の底本である流布本の本文と、流布本との異同を示すために注記された天正本の本文とをそれぞれ組み合わせて、藤房の出家を詳細に叙述していることが理解されるのである。<sup>3)</sup>

この他に、『池の藻屑』において天正本の利用がほぼ特定できる箇所には、①巻四「崇光院」の貞和四年（正平三年、一三四八）の花園院崩御、②同じく巻四の観応元年（正平五年、一三五〇）五月二十日頃の天変地異、③同年文月初めの土岐の乱、④巻五「後光厳院」の観応三年（正平七年、一三五二）の後光厳天皇即位があり、これらの用例もまた、流布本の内容を補うために天正本の本文に取材したものと位置付けられる。

天正本については、本文異同が比較的少ないとされる『太平記』の諸本の中にあつて、例外的に極めて特異な内容の異文を持つことや、他本に見えない歴史的事実を多く取り入れているなどの特色が指摘されている。以上のことから、麗女は『参考太平記』を参考した際に、流布本とは異なる天正本の本文の性質と内容に着目して、『池の藻屑』に利用したのではないかと推測されるのである。

更に、『参考太平記』の受容をめぐっては、『太平記』の記述と史実との関係を考証するために、『参考太平記』に引用された文献資料の一つである洞院公賢の日記『園太暦』の記事を、麗女が少

なからず利用していることも注目すべき点に挙げられる。そこで一例として、『池の藻屑』巻四「崇光院」の観応元年（一三五〇）神無月余、足利尊氏の西国下向と直義の京都逐電の場面を取り上げ、『参考太平記』巻二十八「直冬鋒起附尊氏進発事」の該當箇所と比較すると次のようになる。

「誠に此度は、大事なり」とて、尊氏みづから下るべきに定まりぬ。師直も又したがへり。やがて道登入道して、内にかくと突しければ、御劍御馬を給はず。御劍は経量取つぎ給ひ、御馬は康守牽けるを、道登受とり奪る。出立ん事明日とての夜、「錦小路の入道いづちともなく失給ひぬ」といひさはぐに、誰もくやすからぬ事に思ひあへるを、師直のみ、さりに、共とおだしう思ひ居たれば、追求めんともせず打すて、人々は急ぎたり。東寺の前打過るほど、師直がはたさしなるおの、馬よりおちて手などそこなはれぬるにぞ、やがてとめてこと人をかはりにはなしけり。「北の翁のためしにや」といへど、「かゝる折よからぬ事なり」と、人々はさめきたり。都のかためには義詮をぞ差置ける。（『池の藻屑』將軍此注進ニ驚テ、「サテモ誰ヲカ討手ニ下スベキ」ト、執事武藏守ニ問給ヒケレバ、師直「遠國ノ乱ヲ鎮メンガ為ニハ、末々ノ御一族、乃至師直ナンドコソ、罷下ルベキニテ候ヘ共、是ハイカニモ上様ノ自御下候テ、御対治ナクテハ叶フマジキニテ候。……」ト、強ニ勸申ケレバ、將軍一議ニモ及給ハズ、

都ノ警固ニハ、宰相中将義詮ヲ残シ置奉テ、十月十三日、征夷大将軍正二位大納言源尊氏卿、執事武藏守師直ヲ召見シ、八千余騎ノ勢ヲ率シ、兵衛佐直冬誅罰ノ為トテ、先中国ヘトゾ急ギ給ヒケル。

○園太暦云、二十七日、……退出之後、大夫語曰、今日將軍以二道眷一附二勤修寺大納言源朝一、西国蜂起之由有「其間」之間、為二対治一、明曉罷向之旨申レ之、経頭卿所勞之間不レ參、以二経量朝臣一申レ之、即以二彼朝臣一、被レ下二御劍一、即被レ牽二下御馬一之由、仰二道眷一、御馬北面康守將向、云々。二十八日伝聞、今曉卯刻、將軍進発、……或云、師直旗差葉、於二東寺南門前一、落馬損レ手、仍於二此所一、差二替其仁一、今日可レ到二著淀一、云々。

〔参考太平記〕

このうち、直冬追討軍の出兵に際して改氏が朝廷から「御劍御馬」を賜ったという記事と、師直の旗差が落馬して手に大怪我を負ったという記事について、『園太暦』観応元年十月二十七日と二十八日の記事が用いられていると考えられる。前者は作者麗女の有職故実に対する関心の高さから、後者については、落馬による怪我で旗差が交替したというエピソードが、『淮南子』の塞翁が馬の故事を連想させることに興味を覚えて、ここに書き加えられたのであろうと推測される。

その一方で、直義の京都逐電に関する破線部の記述をめぐって

は、『園太暦』と『参考太平記』の間で事実関係の違いが認められる所でもある。『園太暦』観応元年十月二十九日の記事に拠ると、<sup>(6)</sup> 出発を延期して直義を捜索しよう師直が具申したものの尊氏はその提案を聞き入れなかったとあるのに対して、『参考太平記』巻二十八「直義入道愍源逐電事」では逆に、しばらく都に逗留して直義を捜索しよう進言する仁木・細川の意見を師直が一蹴しており、「師直のみ、さり共とおだしう思ひ居たれば、追求めんとせず打すて、」とする『池の藻屑』の事件の経過並びに師直の人物造形とはほぼ一致している。つまり、『池の藻屑』における『園太暦』の利用は、基本的に『太平記』の記事内容を補足するためのものであり、歴史的に重要な出来事や事件については、『太平記』の方に取材する傾向が看取されるのである。

『園太暦』は、南北朝の内乱期に太政大臣の位にまで至った政界の重鎮洞院公賢の漢文日録であり、『参考太平記』にも収録されているように、当時の実情を伝える貴重な資料の一つであることから、麗女もまた本書の記事内容に関心を示したのであろうことは想像に難くない。しかし、両者の関係で留意されるのは、『池の藻屑』において『園太暦』の記事を参照したと考えられる箇所は、この他にも六例存在するものの、それらは全て『参考太平記』に収録されていることである。

一元二角

	①	②	③	④	⑤	⑥
『池の深層』	親応元年文月初め、土岐の乱	親応二年、尊氏・直義・義隆の飛京	親応二年文月、義隆に男十誕生	正平七年閏二月二十七日、光厳・光明・崇光三上皇と前皇太子直仁親王の質名生遷幸	文和二年、新春の質名生の有様	文和四年晩月、南軍の京都占拠と撤退
『圓太曆』	親応元年八月二十日・二十二日	親応二年二月二十八日・二十九日	親応二年七月二十七日	正平七年閏二月二十一日	正平七年六月十五日	文和四年二月八日・三月二十八日
『參考太家記』	卷二十八「三角入道・直冬・御師・下・西石見一事」	卷三十「尊氏兄弟和時・天狗勢掃事」	卷三十「尊氏兄弟和時・天狗勢掃事」	卷三十「持明院四院主上遷・幸吉野・御持身宮事」	卷三十「持明院四院主上遷・幸吉野・御持身宮事」	卷三十三「京師事」

以上のことから、天正本の利用態度とも考え合わせるに、麗女は『圓太曆』そのものを披見したのではなく、『参考太平記』の中の『圓太曆』の記事を、『池の深層』にそのまま転用したのではないかと推察される。

結果的に、麗女にとって、『参考太平記』の利用は、余分な手間を省き効率よく資料を収集分析することを可能にさせた。一ヶ月

半という極めて短期間で、『池の深層』を執筆できたのも、このような資料の使い方に起因していたためと理解される。麗女は、本文異同や文献資料に配慮しながら、『参考太平記』を丁寧に読み解くことで、『池の深層』の世界を構築していったのである。

多々良一竜（南宗庵）著・多々良吹毛修訂『後太平記』（延宝五年（一六七七）刊）と杉岸芳通著『続太平記』（貞享三年（一六八六）刊）の両書は、近世期に入ってから『太平記』の後の時代を書き継いで成立した仮作軍記である。このうち、『後太平記』は、後光厳天皇の応安元年（一三六八）の義満の元服と征夷大將軍就任より、正親町天皇の天正六年（一五七三）の十五代將軍義昭の没落に至るまで、『続太平記』は同じく応安六年から後土御門天皇の文明年中（年表は文明十八年（一四八六）まで）にかけて、歴代足利將軍の行跡を中心に叙述されている。『後太平記』と『続太平記』については、今のところ典拠の報告がなされていないようであるが、『池の深層』は『太平記』以降の記述の一部をこの二作品に依拠していると考えられる。

『池の深層』が南北朝時代の歴史を叙述の対象に含む以上、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての激動の時代を取り扱った軍記物語『太平記』を参照することは、近世期における『太平記』の受容の在り方に鑑みてもごく自然な態度であったと受け止める

れる。<sup>(9)</sup>しかし、『太平記』は、後光厳天皇の貞治六年(一二三六)十二月、幼少の三代將軍義満の後見として細川頼之が四国から京してくるところで突如として終結する。そこで『池の藻屑』では、『太平記』の世界を受け継いだ『後太平記』と『続太平記』を代わりに利用したものと想像される。

『後太平記』と『続太平記』は同一の時代を取り扱っているため、必然的に両者の記事内容に重複する部分が多く、かつ麗女が記述そのものを簡略化していることも相俟って、『池の藻屑』がどちらの書物に拠ったかを明確に出来ない箇所がまま見られるものの、いくつかの場面についてはその出典が特定できる。

先ず、『池の藻屑』巻六「後田融院」の応安四年(建徳二年、一三七二)条、丹波の国人が義満に芹を献上した出来事を祝して朝廷で献芹の慶賀が催されたという記事については、『後太平記』巻四「周例献芹祭祀之事」を次のように利用している。

此ごろ、丹波の国の民ども、根芹をうるはしき籠に入れて、さげつ、左馬頭がり来りて門に立り。……かやうのはなぐしきまじらひなど、かけてもすべき身ならねば、たゞ夢の心地して、いひいでんことばも、口ごもりつ、わな、くさまながら懐にもたりける歌を、御まへちかくさし置たり。取て見るに、

君が代のゆたかにすめる政ながきねぜりの恵みなるべし  
よからねど鄙びたる心どもにて、せちに思ひよりけん、しば

しも深き深田に下り立て、求め出けん程しるく見えて、人々いみじくけうじあへり。……この事はいみじき幸なるとて、内にも奏し奉りつ、献芹の慶賀といふ事を行はんとす。上も聞せ給ひて、めづらかなる事に思し召れける。其日に成ては、二条の前の大殿ぞ、御使にて参り給ふ。引つらねて、上達部殿上人つとひ参り給へり。

(『池の藻屑』)

同じき年の八月朔日、丹波國の土民村老卅余人、御所の大庭に跪き、一籠の芹を携へ来て、頭を地に厥、献芹の披露を歎きしか共、誰か是を取次ぐ人もなければ、終日泪を垂れてぞ伏し居たり。……良在りて將軍宣ひけるは、「今日汝献芹の故事を存じて芹を進むるか」と御尋あれば、野人何共返答をば申さずして、懐中より短冊一つ取出し、是を捧げ奉る。其董歌に、

君が代の豊に清る政、長き根芹の恵みなるべし

……其後献芹慶賀を行ひ給はんとて、諸卿百官、大名高家、神官僧侶に至るまで、悉く此旨をぞ触れられける。……巳に期日に及び天使として、二条前関白藤良基朝臣、一条殿、九条殿御着座につて、今出川大納言殿、坊城中納言殿、洞院宰相中将、殿上人には、左中将忠頼、新中将親忠、右中将季村、左中弁嗣房、右中弁宣房、藏人左中弁仲光、左少将為有、右少将宗頭、次第に席を列し給ふ。主座には大内修理大夫四位少将入道道階とぞ聞えける。

(『後太平記』)

但し、『後太平記』ではこの出来事は永和元年（天授元年、一三七五）のこととされており、『池の藻屑』とは年次に四年のずれがある。『池の藻屑』は、義満の初期政権下における執事頼之の善政を称賛する『後太平記』の趣旨を念頭に置いた上で、この記事を巻六の後円融天皇の治世の初めに配置することで、その御代をも称揚する意図を持たせているのではないかと推測される。

次に、『統太平記』について、『池の藻屑』巻七「後小松院」の嘉慶二年（元中五年、一三八八）五月条、足利義満の紀州下向及び東国遊覧の記事を取り上げて、『統太平記』巻四「大樹遊」覽于紀伊浜事「井東行」と、『後太平記』巻九「河内国平尾合戦之事」並「危六之術之事」を比較し、その受容の一端について確認しておくこととする。

五月に室町殿、玉津島に詣給ふ。上達部殿上人あまた従ひ参り給へば、事広がりていかめしき御ありさまなり。又「富士の山をも見ん」とて、関の東に赴き給へり。古へよりたぐひなくいひおきつることはりにて、人々いとめづらかにおほえたり。やがて駿河の国の受領なる、泰範といへる者、あるじこまやかにして、舟どもよそひつ、むかへ聞えたり。竜頭鷲首になすらへて、目もあやにしなしつる中に、くだ物酒などしな／＼積て、きよげなるわらはのたげだちもひとしきをえりて、綾錦色々のさうぞくうるはしく出立せ、棹さし楫とりも、いとなまめかしげなり。……歌なども有ぬべき折な

れど、こよなき気色に、中々けをされて、出ばへするばかりのふしも有がたくや有けん、人々は口ごもりてのみおはしつるに、室町の大臣、

きのおまで富士の高ねと見し雪の袖にもうつる田子のうら浪  
（池の藻屑）

是年南方平夷ニ依テ、四方ノ風弭取リテ海内浪静也シカバ、同六月ノ始ツカタ大樹、東海ノ浦々国々御覽ゼラレン為ニ、先ヅ紀路ニ差懸ラセ玉フ。上達部殿上人多数供奉シ給へり。前駆後乗ノ武士三千余騎、童御恩徒數百人、走衆中間雜色等ニ至ルマデ、各裝束飾レ花色香ニ気色ヲ交ユ。允ニ治世安國ノ驗ト見エテ、目出カリシ壯觀也。和歌吹上御覽ジテ、玉津嶋ニ三日御逗留坐／＼、一夜ノ御神樂、奏物ナド進ラセ、椽々ノ舞樂共有ケリ。……ソレヨリ伊勢尾張ノ所々過ガテニ御覽ジテ、駿河ノ府ニ入セ給ヘバ、廳当國ノ守護今川上総介泰範主儲シ奉テ御船ヲ揃テ奉レ迎レ之。竜頭鷲首ニナゾラヘ、蓬萊ノ山ヲ似ンデ、中ニ佳肴旨酒色々ノ珍菓ヲ積、山海ノ品百味ノ美ヲ列タリ。仙菓モ特実ノリ丹竈モ熟シヌル計ニ裝ウテ、十七八廿計ナル少男ノ容顏尤モ美麗ナルニ綾羅錦繡ヲ裁着セ、風冠冠衣襟々ノ風流ヲ尽シテ、童男サナガラ艸女ノ姿ヲ假テ出立セタレバ、艶容タル花貌バセ紅錦ノ日ニ映ジテ春山ノ笑ヲ含ルニ不レ異。……折フシ天山ノ蛾眉嚙テ、士羣ノ雪水底ヲ照シ、一蘆ノ舟身モサナガラ銀漢ニ上ル心地シケレバ、彼



有家ノ參議ガ、氷ヲ布ル浮嶋原ト詠シ事ナド思召出サレテ、  
斯ナン、

昨マデ、富士ノ峯ニミシ雪ノ、袖ニモウツス田尻ノ浦浪

（『統太平記』）

其比京都には都鄙統て醇謹なれば、紀州和歌浦、玉津島の佳景を眺望あるべしとて、嘉慶二年八月二日に大樹京都を打立ち給ひて、同八日に紀伊の和歌に着かせ給ひ、暫く所々の景望遊覧在し、已に十八日御帰洛と聞えしかば、（『後太平記』）三者をそれぞれ比較すれば、この嘉慶二年の義満の遊覧に関する記事が、『後太平記』ではなく、『統太平記』の方に依拠していることは一見して明らかである。

『後太平記』と『統太平記』には、一方にのみ記載されている記事や、同じ出来事を一方よりも詳細に描写した記事が時として見出される。麗女は、それらの記事に着目して、『後太平記』と『統太平記』の双方を参照しながら、『池の藻屑』に取り入れていったものと考えられる。

#### 四

『池の藻屑』への軍記物語の影響を一通り確認した上で、次に両者の相違点について気が付いた点を補足しておきたい。『池の藻屑』の成立に多大な影響を与えた軍記物語であったが、その享受方法には一定の方針が窺われる。両者の関係で注意されるのは、

先ず、『池の藻屑』における戦乱の描写の簡略化である。尤も、これについては、『池の藻屑』の成立から六ヶ月後の明和八年八月に執筆された『月の行衛』にも通ずる性質であり、麗女の歴史物語に共通する特色であると考えられる。そしてもう一つは、『太平記』の叙述の中で極めて特異な印象を与える、『怪異』の描写が、『池の藻屑』に取り入れられていない点である。とりわけ、物語世界の展開を背後から支配する怨霊や天狗の跳梁跋扈いは将来を予言する怪奇現象の描写など、『太平記』と其の世界を継承した『後太平記』及び『統太平記』に共通する特色が、『池の藻屑』に全く投影されていないことは、『池の藻屑』の作品世界を明らかにする上で注目に値すると思われる。

その一例として、『池の藻屑』巻四「崇光院」の正平七年（一三五二）二月条、義詮と和睦した南朝の後村上天皇が長年の潜伏先である賀名生を出御して住吉に行幸された場面における資料の取り扱ひ方は極めて示唆的である。先ず、『池の藻屑』の該当箇所を引用する。

まづ住吉におはしまして、津守の家に入らせ給ふ。やがて住の江殿に渡らせ給はむとて、修理など加へさせ給ひ、国夏をば三位になさせ給へり。宮人共は我御神のめいばくなりとて、いみじうけいめいしあへり。御社にも、御馬を牽せ給ひ、奉幣の御使を立らる。爰なん所もおもしろきわたりなれば、上もさる大山の御目うつしに、こよなう思ひ召れつ、浦のか

たなど御らんぜさせたまひけるに、松のすがたのたくひなかりければ、上、

言の葉も及ばぬ松の木陰談むべもこゝろある神やうへけん

……国量がおかしきひわりご共奉りけるに、八十島の祭りのかたをつくりたりけるを御らんじて、上の御まへ、

御祓する八十島かけていましめや浪治れる時は見えけり此御製をうけ給はりて、国量つかふまつれる。

君が代のあり数なれや御祓する八十島ひろき浜の真砂はこの場面の前半部の記述は、『参考太平記』卷三十「南朝与二義説一伴御和睦」附住吉松折并細川頼春討死事」に基づいて描かれている。

東条二一夜御逗留有テ、翌日躰テ住吉へ行幸ナレバ、和田楠以下、真木野、三輪、湯浅入道、山本判官、熊野八庄司、吉野十八郷ノ兵七千余騎、路次ヲ警固仕ル。皇居ハ、当社神主津守国夏方宿所ヲ俄ニ造易テ、臨幸ナシ奉リケリ。国夏上階シテ、従三位ニ成ナル。先例イマダナキ殿上ノ交リ、時ニ取テノ面目ナリ。住吉ニ臨幸成テ、三日ニ当リケル日、社頭ニ一ツノ不思議アリ。勅使神馬ヲ献リテ、奉幣ヲ捧ケタリケル時、風モ吹ザルニ、瑞籬ノ前ナル大松一本中ヨリ折テ、南ニ向テ倒レニケリ。

そして『参考太平記』ではこの後、折れた松をめぐって、殿の

大戊の故事を引きながら後村上天皇の失政への非難と前途の多難が語られており、風も無いのに松の太木が折れたという「不思議」は、今回の後村上天皇の京都帰還事業が失敗に終わることを暗示する役割を果たしていると考えられる。このように、『太平記』の随所に見出される怨霊や天狗或いは怪奇現象の記述は、人知を超えた何物かが働き掛ける意思によって歴史上の事件が生起するという因果論的な歴史叙述を用いる『太平記』にとつて、欠かすことの出来ない要素であつたと思われる。<sup>(1)</sup>

しかしながら、『池の藻屑』では、怪奇現象のきつかけとなつた神馬の献納と奉幣については取り上げておきながら、それに付随して現われた怪奇現象そのものには一切触れていない。つまり、『池の藻屑』は、『参考太平記』の記事に依存する一方で、怪異に関する記述は意図的に削除しているのである。『池の藻屑』において、『太平記』の手法が踏襲されなかったのは、前もつて予言されていた事件が後の巻々で実現されていくという歴史叙述の形式が、『池の藻屑』の歴史物語としての体裁に相応しくないと麗女が判断したためであつたと推測される。

その代わりに、『池の藻屑』の後半部で展開されているのは、住吉の佳景に触発されて詠まれた後村上天皇や南朝廷臣達の詠歌であり、この部分は『新葉和歌集』（弘和元年（一三八一）成立）巻十七・雑歌中と巻二十・賀歌に収録された和歌とその詞書に拠つて構成されている。

住吉社かんだちに行幸有りて浦のかた御覽せられけるに、松のすがたなとたくひなかりければよませ給ける

後村上院御製

ここの葉もおよばぬ松の木陰かなむへも心ある神やうへけんすみよしの行宮におましましける比、人々色々の心ばへをつくして風流の破子どもたてまつりける中に、神主國量八十島のまつりのかたをつくりて奉りけるを御覽じて

後村上院御製

みそぎする八十島かけて今しはや波をさまれる時はみえけり

従三位国量

君が代の有かすなれやみそぎする八十島ひろき浜の真砂は

すなわち、麗女は後村上天皇の住吉行幸の場面を執筆するにあたって、『参考太平記』から怪異に関する記述を取り除いた部分だけを抽出して、そこに『新葉和歌集』の和歌と詞書を接ぎ合わせたのであった。

近世初期の成立と目される『桜雲記』の記述に換ると、後村上天皇は何度も住吉に行幸されており、「御祓する」の和歌も南朝の正平十六年（一三六一）の住吉行幸の記事の中に収録されているように、これらの和歌が実際に正平七年の住吉行幸の折に詠まれたものかどうかは、多に疑問の余地がある。しかも、後村上天皇の御代を寿ぐ『新葉和歌集』の和歌の内容は、正平一統の混乱した世相とはあまりにも懸け離れているだけでなく、折れた松

に託けて後村上天皇の治世が短命に終わることを皮肉った『太平記』の世界ともおよそ異質なものである。しかし、麗女は、『参考太平記』の怪奇現象を省略しただけにとどまらず、そこに『新葉和歌集』の中から見付け出した後村上天皇の住吉行幸の際に詠まれた和歌群を結び付けて、『参考太平記』とは異なる住吉行幸の情景を『池の藻屑』に創出してみせたのであった。性質の異なる二つの素材を繋ぎ合わせて、独自の作品世界を展開したところに、この場面における作者麗女の創意が存するのである。

#### 注

- (1) 『池の藻屑』の出典に関する先行研究には、尾上八郎『池の藻屑』解題（校注日本文学大系 第十三巻、国民図書・大正十五年）、小泉弘『吉野拾遺と東京随筆の世界』（『日本の説話・中世Ⅱ』第一巻、東京美術・昭和四十九年）、松村博司『歴史物語―栄花物語・四巻とその流れ―』（『搞書房 十六、搞書房・昭和五十四年改訂版）四巻とその流れ』（『搞書房 十六、搞書房・昭和五十四年改訂版）などが備わる。

- (2) 『日本古典文学大辞典』第三巻（岩波書店・昭和五十九年）『参考太平記』の項（長谷川端執筆）を参照。

- (3) 『公卿補任』に換ると、藤房の出家は建武元年十月五日となっており、『太平記』と『公卿補任』との年次の相違は、『参考太平記』でも指摘されているにも関わらず、麗女は、『太平記』の記述の方を採用している。また、竜馬の献上から藤房の遁世に至る一連の藤房説話は、現在では『太平記』作者の虚構と見做されているが、『池の藻屑』にこれらの藤房説話が取り入れられたのは、麗女が

『太平記』の創出した藤房像に共感した結果であったと考えられる。増田欣「藤房説話の形成と漢籍の影響」(『太平記』の比較文学的研究) 角川書店・昭和五十一年

(4) 鈴木登美恵「天正本太平記の考察」(『中世文学』第十二号・昭和四十二年五月)、大森北義「天正本太平記の性格」(伊地知鉄男編『中世文学・資料と論考』笠間叢書一〇九、笠間書院・昭和五十三年)、長坂成行「天正本『太平記』の成立―和歌的表現をめぐって―」(『軍記文学研究叢書』第九卷) 太平記の世界、汲古書院・平成十二年)などを参照。

(5) 拙稿「月の行衛」と『山槐記』(『国語国文』第六十八巻第八号・平成十一年八月)

(6) 『園太暦』觀応元年十月二十九日の記事は、『参考太平記』巻二十八「直義入道愨源逐電事」にも収録されている。

(7) 岩橋小弥太「園太暦について」(『京畿社寺考』雄山閣出版・大正十五年、『園太暦』第一巻・東京大洋社・昭和十一年に再録)、林屋辰三郎「内乱のなかの貴族―南北朝と『園太暦』の世界―」(角川選書二〇、角川書店・平成三年)、鈴木登美恵「南北朝時代と園太暦」(『中世文学』第三十七号・平成四年六月)などを参照。

(8) 後藤丹治「慶徳麗女の歴史物語―月のゆくへを中心として―」(『瑞垣』第二十三号・昭和三十年五月)が、「月の行衛」成立前後の事情に関して、「月のゆくへ」といふこの歴史物語は、前述の如く執筆から脱稿までには僅かばかりの時日を費したのでありますが、材料をあつめて筆を執るまでは、恐らくそれ相当な準備を要したのではないかと考えます。」と言及しているように、『池の藻屑』においても同様に、前もつてある程度の資料の収集・整理

等の下準備がなされていたのではないかとと思われる。

(9) 亀田純一郎「太平記院について」(『国語と国文学』第八巻第十号・昭和六年十月、『日本文学研究資料叢書・職記文学』有精堂・昭和四十九年に再録)、中村幸彦「太平記の講釈師たち」(『ヘグラーフィック版』日本の古典(第四巻) 太平記、世界文化社・昭和五十年、『中村幸彦著述集』第十巻・中央公論社・昭和五十八年に再録)などを参照。

(10) 拙稿「月の行衛」論(岡山大学大学院文化科学研究科紀要) 第八号・平成十一年十一月)

(11) 中西達治「愨電の系譜」(名古屋市立女子短期大学研究紀要) 第二十四集・昭和五十年二月、『太平記論序説』桜楓社・昭和六十年に再録、板垣俊「近世版作軍記と魔界の論理」(『後太平記』の歴史叙述) (高田衛編「見えない世界の文学誌―江戸文学考究―」ベリかん社・平成七年)などを参照。

(12) 『池の藻屑』と『桜雲記』の関係については、後日改めて考察する予定である。

尚、本稿で使用したテキストは、『池の藻屑』は『改訂史籍集覧』第三巻(臨川書店・昭和五十八年復刻版)、『参考太平記』は『参考太平記』全二巻(国書刊行会・大正三年)、『後太平記』は『物語日本史大系』第六・七巻(早稲田大学出版部・昭和三年)、『続太平記』は岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵本(書肆名の無い貞享三年版本)、『新葉和歌集』は『新編国歌大観』第一巻(角川書店・昭和五十八年)であり、引用に際しては読み易さを考慮して私に改変を加えた。

(もりやす まさこ) 台湾・長榮大学助理教授)